書架から
書庫から

『ウォーク・イン・クローゼット』

綿矢りさ　著
講談社　2015年

あなたのクローゼットにはどんな服が入っていますか？カジュアルがメインの人もいれば、きれいめ、フェミニンなどいろんな服が入っていると思います。この本の主人公である早希のクローゼットには、どれも対男用のいわゆるモテ服が詰まっています。この服はこんなデートの時に着よう。これはあの人とのデート用に。なんて具合に、自分を演出するための服が並びます。TPOを考えるのはもちろん大切なことですが、彼女は男のために着飾っているような印象を受け、なんだか楽しくないなと感じました。確かに、服には自分の見せたい自分を相手に見せる効果があると思います。誰も面接試験にふりふりの服なんてたとえそれがどんなに大好きで気に入っていて似合っても着ていきません。そんなことしたら不利不利になるのはみんな知っています。もちろんあの人と出かけるならこの服がいいなとかここに行くならこの服を着ようなんて考えるのもとっても楽しいですけどね。でも、人に見せるための自分の服ばかりのクローゼットなんて、つまらないじゃないですか。対男用の服に身を包み素敵な人と巡り合うために様々な人とデートをする早希ですが、寄ってくるのはろくでもないやつばかり。皆さんもないですか？せっかく好きに着飾って楽しく出かけてたのに、ナンパされてうんざりすること。そんなことが続きうんざりしていた早希ですが、そんなある日、幼馴染で人気タレントのだりあに助けをもとめられます。詳しくは読んで下さい。文庫版の帯には「私たちは闘う、きれいな服で武装して。」とありますが、共感できる人もきっと多いと思います。女の子は服やメイクが武器になるんですよね。気合を入れたいときにヒールを履いたりメイクをいつもよりしっかり丁寧にしてみたり。自分と違う自分を演じたくて服の系統を変えてみたり。おしゃれが好きな子も、あんまり興味ない子も、読んでみてください。あまり長い話ではないですし、すっきり読めてきっと素敵な自分のための服が欲しくなります。

（今井　優香　心理学科４年次生）

書庫から
書架から

『ガリヴァ旅行記』

スウィフト著　中野好夫訳
新潮文庫　1951年

最近、よく児童書を読む。子ども向けとはいえ、結構奥深く面白い。読んだことのなかったものだけでなく、以前読んだことのあるものも読み返してみている。ある程度内容を覚えているつもりだったが、一部忘れていたり、勘違いしていたり、発見があったりと、新しく読むのと変わらない楽しさがある。

そんな発見があったものの一つが、スウィフトの『ガリヴァ旅行記』である。航海中に偶然辿り着いた島々でのガリヴァの冒険物語。児童書になっており、誰でも一度は読んだことのある作品である。第1章の小人国（リリパット）と第2章の大人国（プロプディンナグ）、有名なのはこの2国だが、原作は全4章、他に、ラピュタ（飛島）・バルニバーニ（ラピュタに支配されている地上の国）・ラグナグ（不死人間のいる国）・グラブダブドリップ(魔法使いの国)・フウイヌム（馬の国）がある。

架空の国ばかりな中、唯一実在する国として日本が出てくる。ヨーロッパへ帰る手段として、当時オランダと交易のあった日本に立ち寄る。1709年5月下旬、日本の小さな港町に上陸し、6月にはナンガサク（長崎）から帰国の途に就く。

日本滞在は僅か数頁であるが、多くに「踏み絵」に関する内容が描かれる。ガリヴァはエド(江戸)で皇帝(将軍）に謁見した際、「十字架踏みの儀式だけは免除」してもらうのである。

物語が書かれた1700年代初頭（作品の出版は1726年）、日本の鎖国制度やキリスト教徒迫害が、いかにヨーロッパで広く知れ渡っていたかが窺える。それでも作品に出てくる日本・日本人は、好感を持って描かれている。アイルランド人であるスウィフトは、物語を通して、当時のイギリス貴族制度や、敵対するフランス、オランダなどを強く批判・風刺しているといわれている。そのような中で、日本はまだ「ジパング」としての印象が強かったのだろうか。それともウィリアム・アダムスらの影響だろうか。

風刺的でイギリス自慢の要素もあり、若干読んでいてしんどく感じることもあるが、ラピュタ人の頭が左右どちらかに傾いていたり、地上の島を力で支配したりしているのは、あるアニメーションを連想させるし、馬の国に出てくる下品な生き物は「ヤフー（yahoo）」と呼ばれており、某検索サイトの命名に関連があるのか疑ってしまう、そんな発見・楽しさがあった。久しぶりに『ガリヴァ旅行記』、または児童書を読んでみることをお勧めする。

（杉原　里美　本学図書館情報センター図書館司書）